
大河靈術史

木島 荒氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大河霊術史

【Nコード】

N5686Z

【作者名】

木島 荒氏

【あらすじ】

魔法が現代の生活に欠かせない物になった時代、の過去の話。

魔法はまだ霊術と言われていた時代の山男とお姫様の誘拐物語！？

山男と姫（前書き）

初めて書きました。無理だと思った方は無理しないでください。

山男と姫

魔法、それは『現代』の生活に欠かせない物となっている。魔法は魔力を変換し、物を燃やし、物を浮かせ動かす。

それが『現代』の魔法の使い方である。もちろんその二つ以外にも魔法存在し、人々の生活にとっても重要な役割を果たしている。

だが、これは『現代』ではなく、『過去』の話。

戦国時代、魔法が世間に広まり、少しずつ人々が魔法の存在を認識し、戦にも導入された時代。

この頃魔法は霊術と呼ばれ、霊術を使ったのが霊術師と言われ使えるものが限られていた。

そして、使える魔法、否霊術はとても限られていた。

霊術師が使えるのは主に強化の霊術だけで、自らの体および所持している武器に霊力（霊術を使うのに必要なもの）を注ぎ、自らの体なら運動能力を上げ、所持している武器、主に刀だった場合は折れにくく鋭い刀にする事ができる。

人々はこの一つの霊術しか使えず戦っていたが、ある特別な存在だけがその一つ以外の霊術を使った。『忍者』・『仙人』・『僧侶』この三つの存在のみが強化以外の霊術を使った。

そしてこの物語はそういった存在を巻き込み繰り広げられる物語である。

名も無き山

長門（現在の山口県）にあるとある名も無き山に、五人の人間が居た。

一人はフードのような物が付いたマントを着ているため顔までは見えないが、背は低く、服を着ていてもその体がとても華奢なのは見て分かった。

残りの四人はその一人を取り囲む形でした。

その四人はフードを被った者とは違い、背が高く丁度よいぐあいに筋肉が付いていた。

上半身裸で体に付いている傷を見せている者、片目に包帯を巻いている者など、だが一際目を引いているのが腰にぶら下がっている刀である。明らかにこの山のふもとに居る農民とは違う格好をしている。

山賊 っと山のふもとの農民は呼んでいる。

実際この四人は目の前に居る人間の身包みを剥がそうとしているところだった。

「や、やめてくださいっ！」

フードを被ったほうは、囲むように立っている四人に声を張り上げて、言った。

だが、四人の山賊は多少びっくりしたような顔をしてから、お互いの顔を見てニヤニヤし始めた。

「おいおい、もしかして女かこいつ？」

「被り物の下から見えてんのは相当な上物な着物だ。どっかの金持ちの娘だろ。金になるぜこりゃ」

取り囲まれている女の格好は、マントのような物を被っていてよく分からないが、その下から見えた着物は相当な上物だった。

ふもとに居る農民の中にこのような上物な着物を買える人間など居

るわけがない。それにこの山は山賊達が縄張りとしている山である。ふもとの農民はこの山に近づこうとさえしない。

そのため、この山に来る者の殆どがよそ者である。

「おい、小娘」

山賊の一人が女に向かって言った。

声を掛けられた瞬間、女はビクツとしてから、恐る恐る「な、なんですか？」と答えた。

「金目の物は置いていけ。命までは取らないでやる。断るってんなら、分かってんだろうな？」

すると山賊は、腰にぶら下げている刀を抜いて刃先を女に向けた。女は驚いた顔をしてから、目を瞑った。額には冷や汗をかいている。それは少しの間だった。女は覚悟を決めたように目を開け、四人の山賊に言った。

「私が貴方たちに渡す物は何一つありません」

女の迷いの無い一言に山賊達は顔を曇らせ、刃先を女の喉下に近づけ、女に言った。

「女、身包みを置いていけば命まで取らないって言うってんだぜ？素直に置いていけ」

女は山賊達を睨みつけて何があっても渡さないと意思を表した。

山賊さらに顔を曇らせ喉下に近づけた刀を下ろし、

「渡す気が無いならしょうがねえ、殺してから奪うまでだ」

山賊達は下ろした刀を構えた。この構えからすると、この山賊達は剣の心得があるのだろう。

おそらくは、元々侍だったが何らかの理由で山賊になり人々を襲っていたのだろう。

だが、刀を構えた山賊達から何か妙な変化を女は感じていた。

空気が重くなり、山賊達から放たれていた重圧のような物が一層強くなった。

女は知っていた。この変化を。

「れ、霊術師!？」

靈術師　この時代はまだ強化の靈術しか使えないが、靈術師はその強化の靈術を使い戦っている。普通の農民には教える者が居ないため農民は使えないが、靈術がある程度広まっている今の時代、侍は靈術を使うことができた。

普通山賊で靈術を使う者はあまり居ないが、この山賊達は元は侍だったため、靈術を使うことができた。

「言っておくが今、この刀に靈力を注いでいるから斬られたら、間違えなく死ぬぜ?」

山賊はニヤニヤしながら言った。

女は額に先ほど異常の冷や汗をかいていた。

絶対絶命。

山賊達は女にジリジリと近づいて来ている。

「死ねえええ」

女は死を覚悟した。

だがその瞬間、女と山賊達の間になんかが飛び込んできた。

目を覚ますと、見慣れないボロボロな天井が目に入った。

女はしばらくボーっと天井を見て、いったいに何があったのか思い出していた。

山賊に襲われたことを思い出し、そして此処がいったい何処なのかという疑問に気づいた女は、ガバツと起き上がり辺りを見渡した。

「お、やっと起きましたか」

不意に後ろから声を掛けられ振り向くと後ろに、一人の老人が居た。

老人はにこにこしながら女を見て、こう切り出した。

「怪我が無いようで何よりです。上に着ていた物はそこに畳んでありますよ」

老人はにこにこしながら、女に言った。

女はしばらく老人の顔をボーッと見てから、ハッと我に返り、

「は、はい。先ほどは襲われたところを助けていただき、ありがとうございます」

女は先ほど、山賊達に襲われ斬られる寸前に何者かが自分と山賊達の間割った入ったあたりからの記憶がない。

おそらくは気絶してしまったのだろう。だが、今の状況からして、目の前の老人が助けてくれたのだろう。っと女は思い老人にお礼を言ったが、老人は少し驚いた顔をしてから、女が思っていたことは少し違うことを老人は言った。

「いえいえ、違いますよ。貴方を助けたのは私の孫です。どうやら薪を集めている時に見かけて助けたらしく、また薪集めに行っていました。たぶんそろそろ帰ってきますよ」

確かによく考えると、この老人に四人の山賊達を相手に戦い、女を助けるには無理がある。それに相手は霊術師で、なおさらこの老人が勝てる筈もない。

「そうでしたか。それならその方が戻ってきたらお礼言わないといけませんね」

っと女が言った。そしてそれと同時に、何者かが家の中に入ってきて。

「じいちゃん、戻ったぞ」

青年だった。一人の青年が薪を担いでこの家の中に入ってきた。

女は少々驚いたように青年を見ていた。

すると青年も先ほどまで寝ていた女が起きて、自分の祖父と話しているのを見て。

「お、目が覚めたのか」

っと反応を見せた。

「は、はい。おかげさまで」

このタイミングでこの言葉が合っているかは微妙だが、今の青年の言葉からして先ほど助けてくれたのはこの青年だと気づき、

「先ほどは助けていただき、ありがとうございます」

すると青年は普通に話す女の姿を見て少し笑い、

「いやあ無事でよかったよ。助けた途端に気絶しちまうんだもん」
女はえつと言ったまま顔を赤くしてうつむいてしまった。

青年は、「おい、どうした？」
つと言ってまだ体の調子が悪いのではないかと思いい心配している。

老人は空気を読み。

「取り合えず、なぜ一人でこのような山に来たのか話を聞きましよう」

老人は二人のやり取りが見ていられなくなりそう切り出した。

青年も「そうだな」と言い取ってきた薪を下ろして、老人の隣に座った。

「まずは自己紹介から。私は我草がそう 宗孝むねたかと言います」

最初に老人は自らの名前を名乗った。そしてそれに続いて青年も、

「俺は我草 宗盛むねもりだ」

二人が名乗った瞬間、女はえつ？つと少し驚いた顔をしてから自分も名乗らなければと思いい女も自らの名前を名乗った。

「私は、三首みくび 菖蒲あやめと言います」

老人は女の名前を聞いた瞬間に、目元がピクツと動いたが、二人は気が付かなかった。

老人は少し声を低くして尋ねた。

「では、三首殿。なぜこのような山に一人で来たのですか？この辺の農民ではないし、格好からして相当なお金持ちの家柄でしょう？」

女は「菖蒲で構いません」と言い、少し考えてから話し始めた。

「私は飛騨から来ました。」

菖蒲の言った台詞に宗盛は少し驚いた顔をした。だが宗孝は表情を変えずに菖蒲を見たままである。

老人は菖蒲を見たまま。

「では菖蒲殿。そのような遠くからなぜ一人で？」

老人は淡々と質問を続けた。

そんな老人を見て菖蒲は何か気づいたよう。

「宗孝さんがお察しのとおり私は、全国の半分を統治している三首義重よしむねの娘です」

宗孝はその言葉を聞いて、少し苦い顔をした。

三首 義重とは、この戦国時代に全国の半分を統治し、天下にもっとも近いと言われている人物である。それにそれだけではなく、三首家が戦で初めて靈術を使い戦ったと言われている。

三首家が現在天下にもっとも近いと言われているのは、靈術のおかげとも言えるのである。

だが、そんなすごい人物の娘を目の前にして。

「誰だそれは？」

宗盛だけは誰だか分かれずに少し困っていた。

そんなことを言われても困るのは宗孝と菖蒲である。状況の飲み込めない自分の孫をほって置いて。

「孫が失礼を言って申し訳ない。何せ世間知らずなもので」

菖蒲は「別に構いません」と少し困った顔をして言った。だが宗盛は少しムツとした顔をして、口は災いの元とは言わないが、自分は黙っておくことにした。

そんな孫をほって置いて宗孝は話を続けた。

「なぜそのような娘様がこのような遠くの地の山奥に護衛もなしに来たのですか？」

確かに三首家の人間が護衛もなしに遠くの地の山奥に来るのはおかしすぎる。宗孝の当たり前な質問に返ってきた答えは、少し変わったものだった。

「はい、私は誘拐されたことになっていますから」

さすがの宗孝もこの言葉には驚いた。宗盛も驚いているのだが、宗盛が驚いたことには二つ理由があった。

誘拐されたことになっていることと、自分の祖父が驚いた事に驚いていた。

そんな宗盛を置いて話は進んでいく。

「ということは何者からか逃げているのではないのですか？」

「はい私は忍びに狙われ、父上に逃げるように言われました」
と、ここで

「え？護衛なしでか？」

ここでやっと宗盛がまともなことを言った。

「はい、父上は内部に忍びが居ることに気づき、影武者を用意して私は一人で行くよう言いました」

狙われている娘を一人で逃げさせるのは父親としてどうかと思う宗盛はさらに、

「ていうかさ、そんな大事なことを俺たちに話してよかったのか？」

「確かに、お父上も内部に忍びが居るから護衛も付けずに一人で逃げさせたのに、私たちに喋ってよかったのですか？」

二人の意見は同じだった。

もしこの二人が忍者だったら、菖蒲は此処で捕らえられてしまっている。

宗孝もさすがにこれは無防備だと思ったが。

すると菖蒲は何かを取り出しながら、

「はい。父上は我草の人間、つまりあなた方に頼るようには言いませんから」

その瞬間、沈黙が続いた。

山男と姫（後書き）

感想もしくは直したところがよいところなど教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5686z/>

大河霊術史

2011年12月19日00時00分発行